



佑 啓

社会福祉法人 佑啓会

http://www3.ocn.ne.jp/~fgakusya/

発行者 星見吉英 編集者 三股金利

ふる里学会・和田清
〒299-2725 安房郡和田町黒岩 1190-1
tel 0470-40-7227
mail fgakusya-wada@blue.ocn.ne.jp

ふる里学会地域生活支援センター
tel 0436-86-7762
mail fgakusya-shien@abelia.ocn.ne.jp



ふる里学会・ふる里学会しぜん工房 tel 0436-86-7611
〒290-0265 市原市今宮 1110-1 mail fgakusya@peach.ocn.ne.jp
ふる里学会アネッサデザインセンター 〒299-0118 市原市権 1181
tel 0436-60-7677 mail fgakusya-anesa@od.wakwak.com

みちくさ

三股金利



「おはようございます」今日はミゼロデー。朝の8時から利用者、職員、地域の方々と一緒にいつもの道の除草作業。途中町長さんもお手を添えてくれ、草刈り機を握る手にも力が入る。町長さん始め地域の方々には大変お世話になっている。少しでも地域の人との交流を深めたい。という事で午後には、テニスの交流会も予定している。

お昼過ぎには地域の人が集まり始めテニスコートの整備をしていて。そんなとき「おらがきてるよー」昔テニスをしてた近所のおじさんの開口一番「すみません、いつもお世話になっちゃって」昼食後職員ともまた出かけている利用者のことである。

そこは、施設から300メートルほどの民家の中庭、敷き詰めた3畳程の古いワラに寝ころんでいる。周囲の景色を見ても何が入り込んで行くのか分からない。時々惹かれるようにそこへ行く時間を過ごす。今日はお母さんが迎えに来る日なので安心して待たせて、食事をする。と動きだしあわてて箸を持ったまま制止する職員。どう説得をしようか「行かねばならぬ、とめてくれるお母さん」必死の形相で一目散に施設からそこへ向かう。職員は引きずられるように後につくしかたない。つるつる頭は汗で、横になったまま動かない。暑い。暑い。暑い。タオルやゴザまで持ってきてくれるこの家のおばさん。さらに、これから暑いだろうから日陰にワラを移してあ

げようとか、新しいものに替えてあげようとも言ってくれた。果敢と職員のお手伝いに感謝する職員を尻目にその庭の真ん中でじつと動かぬ様子。彼が施設の利用者として知ってはいない。他人が庭を占拠しているのだから。この気遣いにはただただ頭の下がるばかり。元気の出る出来事にはなかったのだが、ご主人様は場所がどこであらうと変わらぬご主人様で困り果てているのは下僕の職員。意志というより何かに突き動かされる力に抗したい。おばさんの思いやりと待てと化した職員を独り占め。そんな風に生きてみたいと思ったがそれ。大変そう。内から湧き起る力に翻弄されている表情に時々同情の念も禁じ得ない。

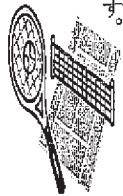
くちはならない。その外界の刺激に反応するシステムが混乱したときつとフリーズを起すためにそこに行くの。施設でもない家庭でもない場所。

我々もよくあることです。仕事から帰りたい。でも「家に帰って古女房なんざみたたくも木」ってんで買の本のあてもないのに本屋での立ち読みや、とりあえずコンビニのドアを押す。でもコンビニの場合は何を買わずにはちよつと出づらいついてくる。悩んだ挙句に買つて帰ると商品を見た女房におかれフリーズ。経験したことないですか。道草の楽しみ。

自閉症といわれる人達のこだわりは多かれ少なかれ皆さんご承知です。それはともかくこういふ地域があるということ。地域生活という言葉の流行りも、だから地域の環境は障害者にやさしくなりましたと簡単ににはなりません。当然断罪しなけれ

ばという場面で逆を力にいたしてくる。この様な環境で生きていく人達がいて、この心強さを感じた次第。そして、大事なことは、生活の拠点。外の時間。今日は道草を刈つてしま

びりと通すことのできる環境も必要です。自然と人情のあふれる地域から、地域生活をもう一度考えてみたいと思います。



さて、往年の名プレーヤーは奥様方とも同伴で、即席のテニス教室で化しました。その後はパーベキューで懇親。足腰に衰えは見えたもののアルノールの方は刃渡り50リッ

転機

松田 源次

日差しが徐々に強くなる季節を迎え、ともに故郷である南西諸島からは梅雨入り間近のニュースもちらほら聞こえてきた。例年ならばこれまでの季節を満喫しながら望郷の念にも駆られていた頃であるが、本年度はいささかその余裕もなく繁忙の日々を送っている感じが強い。人生に幾度か訪れる転機は節目のひとつを刻んで転機という形で本年度を迎えた。この年齢で世話になることは

相応の職責を全うして然るべきであると思うが、組織機能への適合に力を費やしている段階では疲れも蓄積しているといったところである。それは転機を機に公私にわたる環境に変化を伴ったことによるものであるが、これらが及ぼす状況は慣れと時間が徐々に解決してくるものと期待したい。顧みるに、千葉県社会福祉事業団での二十三年間は紆余曲折を経ながらも、総じて人生設計の大部分を占めてきた。この間、培い

経験させて頂いたことに対して感謝の意を表すとともにその基礎と応用が発揮できるよう、新天地で誠心努力して恩返しできればと思う。

さて、通目の早朝、駅に程近い自活ホームまで三名の利用者を迎えに行つたときである。早速、作業着に着替えて玄関先で待っていてくれた。朝、朝ごはんは？と聞くと「自分たちで作って食べた」「仕事に行く準備もできている」とのこと。表情も良く、みんな元気そうである。持ち物確認と健康チェックをして公用車を走らせること三十分。目的地である広大な公園に着くと暫くして会

社の人も到着。それから公園内の芝刈りや草集作業で共に汗を流すが、みんな良く働いた様子もさほど感じられない。会社の従業員は先輩の方が殆どで休憩も十分にたれて

いる。さらに、利用者に対する理解や仕事ぶりを評価してくれるなど働く環境は申し分ない。このような状況と作業工程が日曜日と雨天時を除いて九月いっぱいまで続くことになり、この形態はいわゆる企業内授産である。このほかにも同様の施設外授産を展開しているが、これについては単独受注となっており月二回のペースで行なっている。いずれも授産施設の本年度オープンに伴って開拓されたものである。一方、施設内での科目はパン製造科、園芸科、雑草・花・野菜類の栽培などの作業を行つていて、初年度である通所授産施設「ふる里学会しぜん工房」の運営の安定化(授産収入)を図ることと授産科目の開拓は必須であることから就労自立へ向け社会的資源を有効活用して行くことが必要不可欠と考える。

ところで、障害福祉分野でも抜本的な制度改革が進む中、この度、障害福祉施設施設のブランドデザイン案が提示された。内容を良く理解できないのが率直な感想であるが、障害者自立支援法から見えてくる影響等については今後、動向を注視していきたい。同時にその施策に基づいた支援環境の再構築は必須であることに鑑み、利用者一人ひとりのニーズと状態像を勘案しながら、地域生活が可能となるような支援に努め

また、職員の意識改革並びに更なる利用者の生活向上は今後の課題として取り組んで行くことを結びとして挨拶に代えたい。

(支援課長補佐)

「ふる里学舎」での

新人研修を終えて

くロケットから

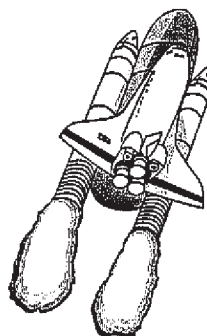
障害者福祉を考える

小杉 洋市

五日間という短い期間ではありましたが、私たち厚生労働省の新人四名の研修生を受け入れていただいた「ふる里学舎」の理事長はじめ職員の方々、そして利用者の皆さんに心よりお礼申し上げます。

私は、厚生労働省に入る前の五年間、日本のロケットの製造／打ち上げ／打ち上げ設備の保守運用に関する仕事を民間会社という立場から行ってきました。その間、H2Aロケットの打ち上げに大回参加しました。打ち上げ当日は発射管制室(ブロックハウス)に入り、ロケット／設備の打ち上げに対する機能確認から、カウントダウン、打ち上げ後の後処置までの作業を見守りました。この機能確認で何か異常でもあったら、即打ち上げの延期そして高額な費用の追加等の発生があるので手に汗握りながらコンピュータ上に表示される各装置及び機器のアンサーを確認していました。そのような作業一つひとつが最終的に打ち上げという形で表されます。確かにロケットの機体／設備は、高い信頼性とそれに反する極限の技術的な要求から成っています。しかしロケットの機体／設備は、あくまで「物」です。今回「ふる里学舎」にて、初めて利用者の方々と接し、①利用者の方とのコミュニケーションの難しさ、②仕事をすることで何を目標とするのか、③利用者を尊重しながら介護するという心理面でのバランス感覚の必要性など

どロケットの打ち上げとは全く違う「人」に対する仕事の難しさを実感しました。それと同時にそのような環境の中で働いている職員の方々に深く心を打たれました。



「利用者が作ってくれた雑草を昨年よりも高い値段で売り、売り上げを出したい。」職員の方のこのような言葉を聞き、こんな考えの出来る施設はきつと職員も利用者の方も前向きに生活出来るのではないかと感じました。一例ですが雑草を通して、「単なる作業訓練としてではなく社会との接点を大切にする事」この事は、どのような仕事をする上でも大切であるし、更生施設であればなおさら大切な考えではないかと感じます。今後私たちが行う厚生労働省の行政に関しても同じです。昨今厚生労働省を巡る様々な不祥事が取りざたされていますが、その原因の一つに社会との接点が希薄になった事が考えられます。

五日間という短い期間、しかも研修という立場でなかなか職員の方々がどのように思いながら仕事をなさっているのか実感する事が出来ませんでした。しかしながら、前述したとおり「ふる里学舎」から学んだ事は大きかったです。

本来であれば、今回「ふる里学舎」を通して見て、体験出来た経験を行政という面から直接生かしていきたいのですが、行政官として私たちはまだまだ未熟です。しかし、この新人という真っ白な時期に障害者の方が生活していること、職員の方々が働いている事

を身をもって体験した事は、今後厚生労働省で働くにあたり目に見えない形で幅広く私たちに影響を与えてくれるものと考えます。

最後になりますが、いつもこの機関紙を読んで「ふる里学舎」を支えていただいている地域の方々はじめ職員の方々、利用者の方々ありがとうございました。

厚生労働省の平成十七年度新規採用職員さんが研修の一環として、ふる里学舎で五日間と過ごされました。

その時の感想と寄せていただきました。

「パン」修行日記

松尾 球太

市原市内にある、あの有名なパン屋クロワッサンで昨年十一月から三月までの五ヶ月間修行をさせて頂いた。「日本一のパン職人になるぞ!」と思いきや、意気込んでいたが、その夢は初日に崩れていった。北斗七星はまだ見える時間帯の出勤、夜型の自分にとっては慣れるまでは時差ボケ状態であった。社員さんの名前、道具の名前もわからない。ここでは白紙の新人である。社員さんは機械のように正確で動きが早い。素晴らしい。初めてパン職人を目の前にし、呆気にとられた。本当に自分にパンが作れるのだろうか。緊張と不安で吐き気さえした。そんな初日であった。

その日の夜は、自分が飛び込んだ世界

の凄さに圧倒され、眠れずにあれこれと考えていた。

何も出来ない自分がクロワッサンで何が出来るだろうか。考えたが名案は浮かばない。遊びだとすぐに浮かぶのに・・・かつこつてもしょうがない。ただ一生懸命に笑顔で元気よくやるしかない自分言いかけてた。その気持ちと感謝の気持ちをもち続ければ、技術も自然に比例してくることを信じてがんばろうと思った。

パン屋は朝がとて忙しい職業である。開店時間の七時に合わせて、パンを一通り陳列させないといけないのだが、クロワッサンの皆さんは、朝の忙しい時間帯からも親身になって毎日教えてくださった。初めに教わったのが、丸目である。丸目というのはパン作りの基本であり、生地を丸めることによりイーストの中に閉じ込め動きを抑える作業である。陶芸科で三年間粘土を捏ねる作業を行っていたので、多少の自信はあったが、この丸目がなかなか出来ない。「ありえない、こんなはずはない」と何度もチャレンジするが、私が触るとよいけ汚くなってしまふ。生地がべたついて手から離れない。なんて不器用なんだろう。社員さんが魔法使いに見えた。技術はもろんなのこと段取りも良く、常に先を考えて行動し無駄な時間が全くない。パンは生き物であり、一分一秒でも目が離せない。緊張の連続である。トイレに行く時間もおしり位であり、その面ではとてもタフな仕事であると感じた。

一ヶ月が経ったある日、丸目が出来た。「どうですか?生地が張れてきて上手くなったじゃないか!」その一言が励みになり、昇るような気分であった。何げない一言一言に敏感に反応した。新人の気持ちに異なることができ、新鮮な毎日を送ることが出来た。

三ヶ月が経ち時差ボケもなくなり、軌道に乗ってきた。教わる事が楽しくてし

ようがなく、出来ない事を教わる事が快感になってきた。今まではない感覚である。仕込み、成型、焼きを一通り教えて頂き、なんとなく流れがわかるようになり、ようやく「何とかなるかも」と思えるようになってきた。

今までの人生の中でパン屋という全く違った分野を学ぶ事ができた五ヶ月であった。新ためて新人のような気持ちになり、自分をリセットする意味で非常に良い経験になった。今後この貴重な経験を生かしていきたいと思う。またお忙しい中親身になって教えてくださったクロワッサンの皆様には感謝の気持ちでいっぱいである。現在、ふる里学舎しぜん工房がオープンして二ヶ月が過ぎ、毎日が行錯誤の連続である。いつの日か日本一のパン職人を夢みて・・・

(支援員)



編集後記

ふる里学舎しぜん工房がオープンし、はやくも二ヶ月が過ぎた。

新しい仲間も増えて、慌ただしい毎日であったが、ようやく落ち着きを取り戻してきている。

しぜん工房の利用者の殆どが携帯電話を持ち、合コンの計画もチャボラ・・・中には、学舎までマイカーで通う方も。

流行の音楽は、利用者からの情報頼りの日々。時代の流れに取り残されぬようアンテナを上げて・・・

パンの香りと共に佐啓五十五号をお届けします

楠元 洋海